

3 セミナー参加者との意見交換

3.1 グループによる意見交換

今年度のセミナーでは、対面形式の会場において参加者同士が数人でグループとなり、それぞれの現場における体育活動やスポーツ活動における事故の現状や取組状況について、講師も参加して意見交換を実施した。

参加者からは他地域、他学校での取組状況を知ることによって今後の取組に新たなヒントを与えられたという意見が多く寄せられている。以下の写真はグループによる意見交換の状況(一部)を示したものである。



3.2 講師との意見交換

グループによる意見交換の後、講師との質疑応答を実施した。以下はそれらをまとめたものである。

図表 3.1 各会場での講師との意見交換

質問と回答	
Q1	<p>体育授業と部活動で、指導者が限られ個々の児童生徒の状況を見ることができない。どのように対応したらよいか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者を確保するのは難しい課題であるが、他の教員の協力も得ながらできるだけ全体を見る人、個々の活動や個人を見る人を確保する必要がある。 ・一般的に指導する人と専門的な立場から指導する人といった体制を確立することが、事故を減少させることにつながる。
Q2	<p>体育や部活動での事故を防ぐために、道具の面で注意することはどのようなことが挙げられるか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・跳び箱やマットレスは古くなるとクッション性が低下し、子どもの活動には危険となる。修繕したり、新しい道具に置き換える必要がある。 ・道具の耐久性は軽視されており、注意しなければならない。 ・テニスやバスケットボール、バレーボールなど、複数のコートを使用する場合、学校側のこれまでの習慣で相互の間隔が十分に確保されていないケースがある。また室内バスケットボールコートでも壁までの距離を十分に確保できていないケースがみられる。コート間の間隔やコートと壁までの距離などは、安全確保のために十分に確保する必要がある。 ・道具の整備とともに、学校全体で学内の運動施設の安全環境を確認する必要がある。
Q3	<p>冬場の体育活動で剣道を実施する場合に、寒さから子どもが裸足になりたがらない。そうした場合にどのように対応したらよいか。裸足でやらせるべきか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部活動と体育授業とでは異なる。体育授業の場合は剣道を練習する時期(厳寒期)をずらすとかの工夫もしてはどうか。 ・剣道は裸足でやる必要があるが、打ち込み練習ではなく他の練習方法を考えることも必要ではないか。
Q4	<p>学校現場で心停止事故を防ぐにはどのような対応が必要か。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・AEDを準備し、まず教職員がこの使い方を十分にマスターすることが必要となる。 ・だれでも使えるようにしておく、一度はさわってみる、体験することが必要であり、事故が発生してからAEDを使用するまでの時間が重要となる。 ・心停止事故が生じておから2分程度での処置を考えた場合には、AED1台ではなく最低でも2台は必要となり、目立つ場所や遠くからでも視認できる場所に設置することが望ましい。 ・学校では2台用意されていることが一般的になりつつあり、このことを法的にも定めていく必要があるだろう。 ・職員室に設置しているケースもあるが、時間外は閉鎖されることが多く、必要な時に使用できなくなる恐れもある。 ・児童生徒にもAEDが用意されている場所を知らせておくことが必要となる。
Q5	<p>神戸市では激しい運動しているわけではないが骨折事故が多い。走っているだけで骨折する事故も多い。子どもの生活環境の変化が影響しているのか、原因が究明しきれていない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの体力や運動能力について、現在の子どもたちがどのようなことができ、どのようなことはできないのかを知る必要がある。事故事例を調べてみることも必要。 ・教材研究の一環として過去の事故事例をしらべ、対策を考えていくことが必要となる。 ・子どもの体力が低下しているならば、それなりに(スモールステップで)対応していくことを考えなければならない。
Q6	<p>校庭に釘を打っているケースが多くみられ、この扱いに苦慮している。他の方法はないのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・釘は取り除く必要がある。釘に代わるものとして何がよいかは関係機関でも検討されている。今後開発企業も出てくると期待されており、費用面からも購入しやすくなるのではないかと思う。
Q7	<p>外部指導員が指導している場合の事故は、誰がどのような責任をもつのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事故を紛争にしないことが重要となる。

3 セミナー参加者との意見交換

質問と回答	
	<ul style="list-style-type: none"> ・事故発生状況や指導委員の対応状況などを調査する必要があるが、スポーツ活動を実施している学校側、指導者側それぞれに責任が生じるだろう。 責任の内容は一概に決められない。
Q8	<p>目や口内等の事故が発生した時にはどのような補償が想定されるのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マウスガードなどは、年に1回程度のメンテナンスが必要となる。 マウスガードの作成や修理は現在保険適用になっていないので自費となる。 ・全国ではマウスガード作成に対して補助金を出す自治体も出てきている。 東大阪市では1件につき5千円出ている。
Q9	<p>サッカーで他の生徒よりも怪我が多い生徒がいる。指導者としてどのように対応したらよいか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サッカーの技術面だけでなく、生徒の内心に何かがあるのではないかと、生活面(食事や睡眠、家庭環境など)はどうかなどに意識を向ける必要がある。 ・生徒が監督やコーチに相談できないような状態ならば、トレーナーが話を聞き指導していくことも必要となる。
Q10	<p>体育や部活動での熱中症が心配。どのような点に注意して指導したらよいか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・競技ごとに児童生徒の体への負担は異なる。 まず競技の特性を知り怪我や事故などの予測を立てることが必要となる。 ・怪我や体力低下によるトラブルを予防するには、児童生徒の日常の生活態度についても観察し指導していくことも必要だろう。 規則正しい睡眠やきちんとした食事をとっている児童生徒にはトラブルも少ない。
Q11	<p>体育や部活動も含めて、事故防止のために学校としてどのような取組が必要か。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事故防止は学校だけで対応したり、学校まかせにするのではなく、家庭や地域社会と一体的に考え対応していくことが必要となる。 ・子どもたちには、まず規則正しい食事や生活環境を守ることと、事故に対する知識を知らせていくことが必要となる。 ・その場合、特に小学生には基本的動作を丁寧にわかりやすい言葉と行動で教えていくことが大切。 ・運動をしたがらない子どもが増えており、そうした子どもを事故から守るためにも、小学生の体育授業は生活面、事故に対する予防知識の面から指導していくことが重要となる。 ・小学生の水泳指導では上手に泳げることも必要だが、5分間水に浮いていられるようになることを教えることが大切となる。 ・小学生の体育授業では、運動経験の無い教員も指導者の立場になることが多い。 一人の教員が全ての事故防止への知識を習得し指導するのは無理であり、教材やツールを利用し他の教員とも連携しながら指導していくことが必要となる。 ・部活動では外部指導者や専門のトレーナーを活用したり、また専門家からオンデマンドで指導を受けることも検討すべきだろう。
Q12	<p>生徒間に運動能力の差があり指導面で困難が生じている。どのような対応が必要か。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員が同一の運動をする必要はなく、指導者を用意できるならば、子どもの運動能力に合わせた運動の種類を選定し、それぞれに指導者を配置し生徒の能力に応じた指導方法を導入することも必要ではないか。 ・指導者が確保できないからといって、子ども任せにはいけない。どのような状態でも指導は必要となる。そうでないと事故防止につながらない。
Q13	<p>体育や部活動はもちろん、日常の学校生活の中でも熱中症が心配になる。どのような準備、対応をする必要があるか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動の活動時間帯を工夫するとか、エアコンのある施設を利用するとかはもちろん必要となる。 ・JSCから多くの熱中症の事例、対策の具体的な情報が出ており、これらの利用を是非お勧めしたい。
Q14	<p>マウスガード使用以外で、歯・口のけがを防ぐために大切なことには、どんなことがあるか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事故防止をする上で第1に自分の競技にマッチした防具を身に着けること、第2は環境をチェックし周りの状況を確認する意識を持つことが大切になる。
Q15	<p>保存液のかわりに使用する牛乳は、(コーヒー牛乳なども含めて市販の)どんなものでもよいか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歯の根にある細胞を保護し長生きさせることが重要となり、牛乳はそのための一つの手段となる。 ・コーヒー牛乳は研究されていない領域であり、基本的に白い牛乳であれば24時間は歯根膜という細

3 セミナー参加者との意見交換

質問と回答	
	<p>胞は生きているという研究成果がでている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヨーグルトも細胞が持たなかったという研究がある。第1選択はあくまで普通の白い牛乳が必要となる。 ・消毒液にいれてくることもやめてもらいたい。 ・学校では保健室に保存液が用意されているが、他に各部活動の救急箱に保存液を用意しておくことが望ましい。
Q16	<p>熱中症が疑われる場合、身体をどのぐらいまで冷やせばいいか。また、現場では、体温測定は難しいので、どんなことを目安に身体冷却などを行ったらいいか。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・氷水に着けることが望ましいが、39度以下になったら低体温症を防ぐためにいったん冷却をやめる。現場で体温測定が難しい場合は、氷水に10分～20分つけたらいったんやめる。 目安は、本人が冷たさに対してどのような態度を示すか(いやがったりする)をチェックすることが大切である。 ・氷水を用意することが難しい場合は、濡れタオルを全身にあてることでも効果がある。その場合は30分程度かかると思われ、救急車が到着するまで冷やし続けることが必要となる。
Q17	<p>熱中症アラートが出ている場合の運動実施の有無について、考慮しなければいけないことはどんなことか。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・日本スポーツ協会の運動指針では暑さ指数 WBGT (Wet Bulb Globe Temperature) が31度以上は危険域として運動は原則中止となっている。33度になると警戒アラートが出る。 ・原則という意味は、この条件は運動状況や本人の体力等の状況によって異なり、十分な対策を確保できるならば、31度以上でも可能と理解できる。 ・高校野球の場合、35～36度でも試合を継続しているケースがある。野球の場合は休憩している時間が多く、熱中症対策も確保されているケースが多いので、そうした場合原則中止でも実施できるという判断になっている。
Q18	<p>一般に、事故を防ぐために学校や指導者に求められる安全注意義務には、どんなものがあるか。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような事故が発生しているのかを知ることが事故防止の基本となる。 ・現在、教員養成課程の中で事故発生やその要因、対策等を学ぶことがない。こうした状況はすぐには変わらないので、まず、教育委員会が現場の教員に情報を提供し、学ぶ機会を保障することが必要となる。 ・事故防止のための様々な資料やツールが用意されており、教員の側でもまず学んでいただき、安全に関する情報を広げていくことが必要と考えている。 ・今の子どもの生活環境や運動や遊びの環境、運動能力等を考慮した指導が必要で、昔と比べたりして同じような指導方法を導入するのは危険である。今の子どもをどうするかが重要となる。この子どもはどこまでできるかを考えて準備し指導することが必要だろう。 ・事故対策には経費と時間がかかる。 <p>学校として必要なことは、このような状況にはこうした対応策をとるといふ仕組みやツール、指導方法を蓄積し、それを教員誰もが活用できるようにしておくことが必要となる。</p> <p>それによって運動経験の無い教員や事故経験の無い教員も対応ができるようになり、事故が起きたのは何が問題だったのかを検証することもできる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの学校、教員ごとに事故防止に向けた取組と工夫がされていると思うが、安全に対する知識や事故防止の経験知がバラバラになっていないだろうか。 <p>共有できる仕組みづくりが必要となる。</p>
Q19	<p>現場の教員の中には、コロナ禍をとおして運動の機会を失った子どもたちが怪我をしやすくなり、体育や部活動の指導に不安感を抱いている人もいます。そうした教員へのアドバイスはあるか。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちに限らず大学生のアスリートの中にも、コロナ禍によって体力が低下し怪我が多くなっているのではないかとされている。 ・外傷を受ける子どもの特性は初心者が多い。コロナ禍の2年間の中でほとんど運動をしてこなかった子どもの運動能力と、教員側の運動能力や指導力の間にもミスマッチがあるのではないかと。 教員側は、子どもは初心者であるという意識を持って対応していくことが必要ではないかと。 ・子どもも教員も両方運動に対するブランクがあることは確かである。

3 セミナー参加者との意見交換

質問と回答	
	<ul style="list-style-type: none"> ・今後、部活動の地域移行もあることから、教育委員会をはじめとしてこれまで以上に事故防止のために現場へ目を配っていくことが必要となる。 ・子どもの変化と先生の変化の両方を考えていくことが必要となる。 先生のほうは子どもの変化を考えて、コロナ以前と同様の指導方法でよいかどうかを考える必要がある。 また、事故防止のためには過去の事例に学ぶことが大切となる。
Q20	子どもの突然死には、その子の基礎疾患が影響しているのか。
	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎疾患があることで突然死を引き起こすということは考えにくい。 そのほかの要因が様々に絡み合って生じるのではないかという意見がある。
Q21	スポーツが苦手な児童生徒への指導方法はあるか。
	<ul style="list-style-type: none"> ・永遠の課題である。 児童生徒には個々に運動能力の差があり、いっしょにプレーすると事故につながりやすい。 個々の児童生徒の状況を観察し、それにマッチした体育指導をしていくことが必要となる。
Q22	メンタルヘルスの取組が必要ではないか。
	<ul style="list-style-type: none"> ・体育活動や部活動の現場ではメンタルヘルスの面でトラブルが起きていることも多い。 ・体育やスポーツの事故が生じた場合、児童生徒に対してトラウマにならないようにするためにも、指導教員が一人で対応するのではなく、養護教諭やスクールカウンセラーなど、心の専門家ともいっしょになって対応していくことが必要となる。
Q23	突然死、心疾患についてもう少し具体的に聞きたい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・小児の心臓に関する医療はかなり進歩しており、突然死を心配しなくともいいようになってきている。 ただ一部の疾患として、大動脈や左心室（肥大型心筋症の症状）に病気のある方、不整脈を起こしやすい方など、専門的な病気の方の発症がわずかに報告されている。 <ul style="list-style-type: none"> ・持久走やシャトルラン、急激に心臓に負荷がかかるような運動については、主治医と相談したほうがよい。
Q24	AEDの配置方法や個数はどう考えたらよいか。
	<ul style="list-style-type: none"> ・1分以内にAEDをとってこれるかどうかで配置を検討することが必要。また、鍵がかかっているかどうかを確認することも重要となる。 ・1個しか確保できていない場合は、活動場所（水泳など）に持っていったり、複数個所で同時に激しい運動が行われないように工夫するなど、効率的に使用することも必要。
Q25	学校や指導者に安全注意義務が求められるのは何故か。
	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒は大人よりも危険を予知したり防御する能力は少ないという判断から、周りの先生や指導者がバックアップして危険を回避するという考えから求められている。
Q26	事故が起きてしまった場合の対応はどうしたらよいか。
	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の先生や個人に任せるのではなく、組織（学校など）として対応することが必要であり、保護者に対しては速やかにコンタクトすること（事情がはっきりしないからとほおっておかないことが重要、誠意を示す、窓口を1本化することも必要）。 さらに、調査すべきことは調査すると明確にして対応することが必要。うやむやにさせない。 <ul style="list-style-type: none"> ・文科省のガイドライン等を参考に速やかに対応することが必要。
Q27	コロナ禍での体育や部活動の接触行動の制限で、子どもたちの運動量が減少し怪我をしやすくなってきているという懸念がある。専門家としてどう感じているか。
	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ以前に比べると、運動能力や体力は下がってきている感じはする。今後子どもたちにどのような健康変化が生じるか、正直予測がつかない。 継続的に調査していくことが必要と思う。 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちにコロナ以前と同様の運動を科すのではなく、段階的な対応が必要と思う。 今の子どもたちの状況を観察し、同一の目標をたてるのではなく、個別に対応していくことが必要。
Q28	救急救命講習で注意すべき点は何か。
	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒同士で遊び半分で胸骨圧迫はしてはいけない。肋骨骨折や打撲傷を起こした報告があり危険性がある。 ・人同士でやらず、人形やシミュレーターを用いるように注意しなければならない。